

現代ゴシック文化の種

川口 淑子

1. 序

現代文化の研究者が定義に困難を覚えるものとして、ゴシック、あるいはゴスがある。そもそも、これがジャンルなのかモードなのか、一時的な流行なのかは議論を呼び、このすべてであると言うのが正しいように見える。一般にゴシックと呼ばれるものは、類を見ないほど範囲が広く、尖塔を持つゴシック建築から 18、19 世紀に書かれた古典的ゴシック小説、現代の音楽やファッション、さらには観光や町興しにまで裾野は広がり、同属があまりに多い生物のような生態を見せている。

19 世紀建築の大きな動向であったゴシック・リバイバルでは、単に様式をコピーすることを超えて、安定や人間らしさを求める人々の感情が様式に結び付けられた。現代のゴシックに於いても、型の中により多くの意味を盛り込もうとする傾向があり、これは過去にあったものの模倣を超えた複雑な織物に近い。ポップ・カルチャーの研究者たちが繰り返し認めているように、現代のゴシック、あるいは特に若い人々のポップ・カルチャーに見られるゴスにはパフォーマンスの要素がある。つまり、真似をすると同時に、表現者は本物のゴシック的存在として行為を行う。言い換えると、偽物の、または単なる真似のゴシックはない。これは、ゴシックが独特の自由さ、時代に影響されない根本的な人間の特性を含むためだと考えられる。

本論では、十九世紀末に書かれたヘンリー・ジェームズ (1843-1916) の短編小説「フリッカーブリッジ」(“Flickerbridge”, 1902) を現代ゴシック文化と照らし合わせ、現代ゴシック文化のルーツの一つを確認していく。

2. 加工品としてのゴシック

ヘンリー・ジェームズは晩年に多くの短編小説を書き、そのうちかなりのものはゴースト・ストーリーに分類される。しかし、ある種のゴシック・モードで書かれていても、恐ろしさはあまりなく、むしろ、それなりの年齢に達した

人間の生活の意味深さや、生活の中の哲学と関わり、特定のジャンルには当てはまらないものが少なくない。ゴシック・モードを自由に使いこなした、いわばゴシックの応用編の作品としては、「楽しい街角」 (“The Jolly Corner”, 1908) や「第三の人物」 (“The Third Person”, 1900)がある。これらの物語には、幽霊やアルター・エゴは登場するが、それらは主人公たちに利用されるために呼び出されたとさえ解釈でき、古典的なゴシック小説とはかなり異なる性質を持つ。本論で取り上げる「フリッカーブリッジ」には、これらの作品以上に現代のゴシックに見られる特徴が多く含まれている。

「フリッカーブリッジ」は、ジェイムズの作品集ニューヨーク版の 18 巻目に収められ、巻頭を華々しく飾る人気作品「デイジー・ミラー」 (“Daisy Miller”, 1879) とは対照的にこの巻の後ろから二番目に配置され、あまり注目されることはない。しかし、現代ゴシックとの繋がりを考えると、幽霊や恐怖を使うことなくゴシック的作品として成立しているこの作品は興味深い。知人の親戚が所有する古い屋敷を訪れ、時代から取り残された人と物に出会うというシンプルなプロットのこの作品は、作品の性格を紹介するかのよう、まずは薄暗い雰囲気から始まる。パリからロンドンにやってきた語り手は、“The British capital was strange grey world to him, where people walked, in more ways than one, by a dim light”(440) と風景を受けとめる。

そして、滞在先で出会う恋人の親戚の女性は以下のように紹介される。

Miss Wenham, fifty-five years of age and unappeasably timid, unaccountably strange, had, on her reduced scale, an almost Gothic grotesqueness; but the final effect of one's sense of it was an amenity that accompanied one's step like wafted gratitude. (450)

いかにもゴシック風の風景と人物で読者にヒントを与え、直接的にゴシックという言葉が作品中に持ち込まれるこの作品は、一種のメタ・ゴシックであり、現代性を帯びている。19 世紀末に書かれたこの短編小説は、現代と同様、既存のゴシックについて読者が知っていることを前提とし、自分が加工品であるというアイデンティティーをはっきりと打ち出すことで成立している。ジェイム

ズが読者に期待している知識には、古典的ゴシック小説に加え、この時代に多く見られたゴシック・リバイバルの建築物や古いものを好む人間が多く存在するという社会状況も含まれているだろう。

過去の作品を踏み台として、好みに合うように選んだパーツを組立てる現代ゴシックの手作り感、特にスチーム・パンクがよく表している。文学からアクセサリーのデザインまでも含むこのジャンルでは、人間的な機械や機械に近い人間がクローズアップされ、最先端のテクノロジーを作品化しているにもかかわらず手の温もりの感覚や個人的な趣味を迫及する方向性が濃厚に表れており、ウィリアム・モリスの職人芸礼賛を思い起こさせる。言い換えると、現代のゴシックでは過去を巧妙に取り込んでいるが、それはしばしばノスタルジーだけでなく人間臭さの回復も目指している。ニコラス・ダリーは、ヴィクトリア朝時代にいくつも開催された博覧会の影響で、人々は物を利用価値からではなく、それ自体の価値のためにじっくりと鑑賞するようになったと考えているが(52)、この観察眼はスチーム・パンクに受け継がれているだろう。そして、この分野では、自らが加工品であるという意識は避けがたいものである。

現代の音楽の分野では、80年代初頭からゴス・ロックと呼ばれる独特の雰囲気を持つジャンルが認知され始めたが、グラム・ロックやパンクの後を追って世に出てきたこの音楽の特徴は、一つには個人的嗜好の迫及にあるだろう。ポップ・カルチャーのエキスパートであるナターシャ・シャーフは、まずはパンクがファッションやアート、音楽においてDIY的なアプローチをする下準備をしたと指摘し(15)、次に登場したゴス・ロックでは既存の材料を自分流にアレンジすることが基本となっている。このジャンルの音楽は、陰鬱さがある歌詞や旋律にのせて極めて個人的な色を表現しようとする姿勢を持っているが、過度な毒々しさとは距離を保っている。個人の趣味の表現であるこのゴシックでは、楽曲制作の副産物であるアルバム・ジャケットや衣装などもしばしば総合的なアート作品の一部として作られ、知的でもあり、危険な要素は削減することで一般の人々が受け入れやすいゴシックに変形されている。そして、この方向性は早くも19世紀にヘンリー・ジェイムズ作品に見られるものである。

3. 怖くないゴシック

既存のゴシックから特定の部分を選択し、発展させるという加工を煮詰めた形が、怖くないゴシックであろう。現代、とりわけイギリスでは美術館や地方自治体、一流デパートが、競うようにゴシックの企画を取り入れているが、共通しているのは、極端な要素がほどよく薄められていることであり、ファミリー向けに企画されることも少なくない。イギリスのお祭りや現代のゴシックを分析したエマ・マケボイは、現代ではゴシックは過去やポップ・カルチャーの歴史自体を振り返る主要な方法の一つとなっていると指摘し(165)、さらに現代のゴシックは便利なシニフィエとして機能するため、実際には怖くないのに怖いものを示唆することも可能だと適切に分析する(178)。

恐怖が薄らいでいるのが現代ゴシックに広く見られる特徴だが、古典の「フリッカーブリッジ」も、不気味さや古臭さをクローズアップしているにもかかわらず、怖くないゴシックである。主人公のグレンジャーは、明らかに古めかしい館での滞在を楽しんでおり、その様子は以下の場面によく表れている。

It was so “there” that, as had befallen him in Italy, in Spain, confronted at last, in dusky side-chapel or rich museum, with great things dreamed of or with greater ones unexpectedly presented, he had held his breath for fear of breaking the spell; had almost, from the quick impulse to respect, to prolong, lowered his voice and moved on tiptoe. (449)

目の前のゴシック的空気が乱されて、非日常を楽しむ機会が消えないように細心の注意を払う様子は、自分のアルター・エゴを脅かして逃げられないように気遣う「楽しい街角」の主人公を思い出させるが、この行動は現代、エンターテイメントとして定着しているゴシックの観光ツアーでの客の振る舞いに通じるものがある。収益が十分に見込まれるこのようなツアーでは、立案者と参加者は自分たちが踏み込んでいるのはゴシック的世界だという意識を明確に持ち、この雰囲気は損なわれることは望まない。

歴史のある建物や幽霊が出ると噂される屋敷を訪れるウォーキング・ツアーは、特にイギリスにおいては何十年にも渡って人気を集めているが、ビジネスとして

は恐ろしさだけが強調されないことが重要である。万が一にも幽霊が出ると噂される屋敷で本当に幽霊が出ると、ツアーには混乱が生じることになる。そもそも、参加者は、幽霊と出会う確率は低いという前提で幽霊ツアーに参加している。

「フリッカーブリッジ」では、語り手は貴重な古い時代の品々とゴシック風の女主人の雰囲気をつアーク客のように楽しみ、危険に直面しているわけではない。語り手グレンジャーは、見ることも仕事の一部である肖像画家であり、非常に繊細な感覚を持っていると作品のはじめで紹介される。古典的なゴシック小説では、感受性が強く悲劇に巻き込まれる女性が頻繁に登場するが、グレンジャーはその男性版だと言える。ジェイムズの典型的な信頼できない語り手である彼は、古い屋敷で見ると驚嘆するが、彼の評価は大げさである可能性が暗示され、そのせいで作品の恐怖感は薄められることになる。彼の読者に対する役割は、幽霊ツアーのガイドと共通する部分がある。いわくつきの場所を訪れるツアーでは、ガイドという仲介者が同行しているからといって、ただちに幽霊屋敷が偽物であることにはならない。幽霊との遭遇の確率は低くてもゼロではないことが、ツアーの条件として満たされる必要がある。グレンジャーは、現実的な恋人と馬が合わないほど繊細なため、語り手としては頼りないが、そのせいで彼が評価する事物の価値が全否定されるわけではない。

さらに、ジェイムズが好む曖昧さは、この作品では恐ろしさを軽減するだけでなく、全く反対にゴシック的な効果を高めてもいる。なぜなら、グレンジャーが見る薄暗いイギリスの、すっきりと分析できない霧に包まれたような雰囲気は、伝統的にゴシック的なものの住処として使われるためである。ジェイムズは余韻や不在者の影響力を巧みに使う作家だが、不気味さや不安を扱う際には、この間接的表現の技が最も冴えていると言える。作品中にほとんど登場しないか既に亡くなってしまった人物が強い影響力を見せる例はいくつもあり、代表的なものとして『鳩の翼』(*The Wings of the Dove*, 1902)のミリー・シールが挙げられる。アンドリュー・カッティングは、この作品ではミリーの死の場面を直接描かないことで、その死は作品中に拡散していると考え(82)、この作品の空間は墓場の様相を帯びるとまで表現するのは(97)、うなずける分析である。このような間接的で暗い支配力は、濃度の差はあっても怖くないゴシックに見られるものである。

「フリッカーブリッジ」の場合、古いものの美やユーモアが作品の表面にあり、その奥には暗いトーンが常に潜んでいて作品をつなぎ合わせている。それは、グレンジャーの好みと目の前に実在する古く暗い屋敷が共鳴して奏でるゴシック趣味自体の音と言えるかもしれない。ここでは、恐怖は裏に隠れ、裏から表面を支配することで、怖くないゴシックを作り上げている。観光用や消耗品としてのゴシックと手応えのある作品となるゴシックの違いを考えるなら、表現されるべきものが単に薄められているのか奥に隠れているのかという違いが、一つの目の付けどころとなるだろう。

4. フィルターとしてのゴシック

ジョン・P・リケレムは、ゴシックが世界観や美意識、文化の対立を表現する媒体として適しており、現代性があることを見抜いているが、現代文化を見る際には、ゴシックは有効な鍵である。アメリカのテレビドラマでは何十年にも渡り、ゴシックがもてはやされている。*Twin Peaks* (1990-1991)と *The X Files* (1993-2002)は、広く一般的な視聴者をも引き付けたが、それ以降も *Medium* (2005-2011)や *Dead Like Me* (2003-2004)、*Ghost Whisper* (2005-2010)、*Vampire Diary* (2009-)などの人気番組は、社会事情と歩調を合わせながら、従来のゴシック風のドラマに一ひねりを加えて人気を集めてきた。注目すべきなのは、視聴者の感覚に対する番組の細やかな対応力であろう。前述したテレビドラマは、放映された時期の話題や特にアメリカの経済状況、世論などに合わせ、少しずつゴシックとしての形を変えているように見える。

バンパイアが外部からの侵入者や社会不安を表すものだと昔から言われてきたように、ゴシックが社会状況を写しやすいのは確かだが、特に毎日の生活と密着したテレビ番組は、特定の事物が大きな社会問題を象徴、反映しているという大雑把なレベルを超えて、人々の日常的な気持ちの変化、姿勢を表現する媒体となりえる。何か大きな事件が起こった後や、特定の政治、経済的問題が話題となっている際には、例えば、権力者に対する反感や家族を失った被害者への同情、漠然とした将来への不安の高まりなどに、このようなテレビドラマは幽霊や怪物を活用して非常に敏感に反応を示すようになっている。言い換えると、その地域、その時期の人々の気持ちや考えを知りたければ、ゴシック

というフィルターを通して見るのが一つの有効な手がかりとなる。

バンパイアや狼男のようなキャラクターは、小説、コミックス、映画、アート作品など様々な分野で異なる作家、監督に作品化されてきたが、同様に、例えば「バットマン」のような作品も作者や監督、役者を変えながら非常に長く生き延びてきた。このような再利用しやすいという柔軟性は、人々の嗜好や社会状況に応じて形を変えるゴシックの性質の表れである。

ピーター・ギャレットは、ジェイムズの長編小説『使者たち』(*The Ambassadors*, 1903)を分析する際に、この作品ではゴシックは恐怖を感じさせるものではなく、感覚を開くものだと指摘しているが(206)、このようなゴシックの利用方法は、ジェイムズの短編小説にもしばしば見られる。人々がゴシックのテレビ番組を視聴することで自分の深い部分にある感情を再確認するか、逆に番組制作者に曖昧な気持ちを吸い上げてもらい、ゴシック・ドラマの形で気持ちや考えを具体的な表現に結び付けるように、「フリッカーブリッジ」では、冴えない語り手は不気味さもある古風な環境の中で、それまでになく自己表現を成し遂げているように見える。文筆業でかなり成功している恋人に比べると、グレンジャーは、ほとんど世間で評価されていない肖像画家だが、古い屋敷での彼の感性は以下のように研ぎ澄まされている。

The larger, the smaller past – he scarce knew which to call it – was at all events so hushed to sleep round him as he wrote that he had almost a bad conscience about having come. How one might love it, but how one might spoil it! To look at it too hard was positively to wake it up. Its only safety, of a truth, was to be left still to sleep – to sleep in its large fair chambers and under its high clean canopies. (452)

古い屋敷にある骨董品は、自分が注意を向けるだけで目を覚ましそうだと感じるグレンジャーは、特殊な環境の中で感覚が鋭敏化されており、次の段階では、現実的な恋人が屋敷に来たらどんな結末につながるか、彼女を遠ざけるためには何をすべきか、普段なら期待できないような冴え渡った分析を披露して見せる。ジェイムズの多くの作品では隠された事実を突然悟る気づきの瞬間や感性が開くという展開が重要かつ非常に印象的だが、しばしば神秘的でもある

この瞬間や展開は、ゴシック的背景の中でも独特の光を放つように見える。

なぜゴシック小説やゴシック・モードのテレビドラマには深い洞察が時折表れるのかという問題は、かなり複雑だが、現実から一步離れた非日常の設定内では、ある種の匿名性が生まれ、刺激によって感覚も冴えているために、本当に言いたいことを言える条件が整っていることは確かだろう。サイバースペースと同じように、モンスターや幽霊がいる空間では、個人の現実や責任は保留となって感情表現が行いやすくなるため、ゴシック的空間は個人を多くの人々と繋ぐ場となりえる可能性も秘めている。

特に現代のゴシック・ドラマでは、しばしばユーモアが巧妙に持ち込まれるが、それは単なるコミック・リリーフではなく、感情表現や洞察が可能となる空間が出来上がっており、冗談の奥には重要な洞察が隠れている可能性があることを示唆している。

難解で長大な作品が多いジェイムズの場合、短編小説では時折コミカルなトーンが持ち込まれる。例えば、重たい印象のある屋敷の女主人は、あなたは危機に直面していると語り手に脅かされると、““Oh I can hold my own!” said Miss Wenham with the headshake of a horse making his sleigh-bells rattle in frosty air.”(462)と薄笑いを誘うが、このユーモアは古臭い人物に対する愛情や弱者のもの悲しさの上に成り立っている。

リニー・ブレイクは、死者が他の死者を助けるテレビドラマ *Dead Like Me* は、日常の価値を再確認し、生活をよりよくすることがテーマだと鋭い洞察をしているが(41)、このような番組に人気があるのは、視聴者がエンターテインメントの裏にあるものにそれとなく気づいているためであろう。ゴシックは、個人の好みというレベルで消費、あるいは生産されるが、ビジネスの世界では利益を生むアイテムとして受け入れられており、儲かるビジネスとして広く一般の人々に向けて発信できるという両面性を持つことは興味深い。そして、この営利目的の場では、思いがけず意味深い表現や理想的なコミュニケーションが成り立つことがあるのは注目に値するだろう。

5. 共有されるゴシック

スチーム・パンクやゴス・ロックが個人の趣味や職人的感覚を重視した人間

のかつ知的なジャンルであることは前述したが、現代のゴシックは内向的傾向を持つと同時にフェスティバルやゴス・クラブなどにおいては人と共有もされる。そもそも恐怖は他者や異物が存在することで成立し、完全に個人で体験することはできない。古典的ゴシック小説が、しばしば社会不安と関係していることは繰り返すまでもないが、このジャンルはもともとある種の社会性を備えている。さらに、他のジャンルと融合しやすいという面白い特性のために、もともと別の領域に属していた人々を巻き込む可能性を秘めている。

ゴシックに近いものとしてはファンタジーがあるが、共通しているのはどちらも超自然的要素とある種の社会性を含むことである。イギリス小説の超自然的要素を分析したグレン・カバリエロは、現代の文学作品では子供向けのフィクションの中に超自然的な要素が残り、このジャンルでは、社会問題が扱われるようになってきたと変化を見取っているが(215)、同じく想像力の領域に踏み込むゴシックにもこれは当てはまる。しばしばゴシック・ロマンスとファンタジーの区別は難しいが、そもそもロマンティズムとゴシックの区別も簡単ではない。一流の服飾デザインを専門とするリン・Z・バセットは、ロマンティズムは非常に多くものを含むために定義は困難だと考えるが、バセットの服飾の説明においてはロマンティズムとゴシックはほぼ同義であるように扱われ、この二つは同じものの明るい面と暗い面であるという印象を抱かせる。またバセットは、スチーム・パンクは個人の好みを深化させたファッションであると同時に、このゴス・ファッションでは、女性がシルクハットをかぶり、男性がコルセットや宝石を身に着けるといように男女差の消滅も起こっていると指摘し(89)、ゴシックの境界を超える性質も示している。

文学においては、異なるジャンルが入り混じるだけでなく、ある種の哲学や思想が混じりあう可能性もある。その好例は、リケレムが適切に指摘している、「ドリアン・グレイの肖像」(*The Picture of Dorian Gray*, 1890)の中で起こるゴシックの唯美主義化と唯美主義のゴシック化だろう(26)。

古典的ゴシック以上に現代のゴシックでは、異分野と融合するという特徴が強く見られる。現代文化では、ゴシックは恐ろしさと同様、歴史と結び付けられることが多く、「クラシック」と混同されることが珍しくない。例えば現代の家具を考えると、販売の上では、ゴシック家具という呼び方が日本ではかな

り認知されており、これはしばしば、クラシック家具、ロマンチック家具、姫系家具とも呼ばれている。

古典的ゴシック、現代ゴシック両方の研究者の多くが、ゴシックは境界線を越えるものだと定義しているが、この越境越えが、古い時代からあることは、アンドリュー・スミスが指摘するドラキュラ伯爵のパラドクスによく示されている。スミスは、ドラキュラが男性性を象徴するロール・モデルであると同時にドラキュラのような人物になることは逸脱者になることを意味すると根本的な矛盾を見抜いている(37)。

このようにゴシックは他の分野と融合、混同されることが多く、細菌のようにしなやかに隙間に入り込み、時代や環境に合わせて変化し、浸透していく。様々な分野で使いやすいという柔軟性を持つために、ゴシックは、殺そうとしても死なないバンパイアのように個人や時代の枠を超える強さを備えている。

「フリッカーブリッジ」が明らかにゴシックを意識していても、単色でその色に染まっていないのは現代的であり、このジャンル本来の性質を暗示してもいる。

ゴシックに見られる様々なパラドクスや混乱は、ゴシックが境界を超えるものであるという性格から来る。日常から非日常の領域へと踏み込むゴシック的な人物は、異なる世界を混在させてしまうために世界を不安定にする。現代文化では、一時的に黒づくめの服を着て暗い美の雰囲気を楽しむゴス達を社会学者が実際に調査すると、彼らはたいていごく普通の若者で、状況に合わせて振る舞いや衣装を変えることは研究者の間ではすでに了解事項となっているが、それでも彼らは偽ゴスではない。

ゴシックを実践することは生活を黒一色に染め上げて近づきたい人物になることではなく、ドラキュラ伯爵のように不安定なアイデンティティーを持つことこそ正しいやり方である。そして、この性質のためにゴシックは実に長く断絶することなく、文化的要素として生きながらえてきたと言える。境界を超えるものというゴシックの定義をさらに詳しく再定義するなら、ゴシックにはもともと欠けがあり、その部分にその時代の要素が入り込んで異質なものどうしが結びつくことで、新しいゴシックの形が出来あがるということもできるだろう。

「フリッカーブリッジ」は怖くないゴシックだと分類したが、奇跡的に残るゴシックの館が危険に晒されているという解釈は、語り手の思い込みである可能性が否定できず、何より、古風な人と物に深い愛情を抱くグレンジャーは、古典的ゴシック小説の常識に反して最後には自由に屋敷を出て自分の都会的生活へと帰って行く。フリッカーブリッジという屋敷は、脱出不可能なゴシックの城ではない。しかし、そのせいでこれがゴシック的作品ではないと断定することはできない。古めかしく美的な環境に魅惑されながらも、自分はそのに属さない現代人だという意識を持ち、そこから立ち去ることもできるグレンジャーは、非常にゴシック的である。彼は、奇跡的に残る古い屋敷と女主人は保護しなければ消えてしまうと考え、ゴシックの弱い一面を呈示するが、同時にゴシックと強く共鳴する彼自身が屋敷から自由に去ることで、柔軟でしたたかに強いゴシックの一面を暗示もする。

6. 結語

既に見た通り、ゴシックにはいくつかのパラドックスがある。まずは集団向きでも個人向きでもあることだが、もう一つにはホメオパシーのように、薄めれば薄めるほど潜在的な力を見せる側面があることだろう。現代のゴスは、なにかしらゴシック的な商品を受用するだけで、自分が選んだライフスタイルの中でゴスになったと見做すことができる。もし伝統的なゴシックスタイルこだわらず、自分の好みを強調した個人的な一ひねりを加えるなら、手本からは離れるものの、ゴシックから離れることにはならない。個人の領域に深く取り入れられ、ある意味で亜流になるほどに、ゴシックの特性の一つを色濃く表現するというパラドックスが生じることになる。

「フリッカーブリッジ」では、グレンジャーは自分が見つけたゴシック風の館とその女主人が世間の話題となり、古い理想が破壊されてしまうことを恐れるが、結局、古典的世界が人目に曝されて消えたのか否かは作品中では語られない。ジェイムズが結末を書かなかったために、ゴシックは強い光には弱いのと同時に、したたかな生命力があり、群衆に発見されても滅びない可能性があることに加えて、いわばゴシックに開眼したグレンジャーが町に戻ることで新たなゴシックの種が密かに撒かれたと読むこともできる。古い屋敷を好みなが

らも、自分はそれを変化させてしまう有害な現代人だと考えるグレンジャーは、位置づけとしては現代のゴスに近い。

現代ポップ・カルチャーのゴシックを 19 世紀に書かれた「フリッカーブリッジ」と比べると、時代を経てどの要素が選択されて発展したのを見るだけでなく、古い時代に書かれた小説の普遍的価値を現代から肯定することにもなる。古典的作品が書かれた当時、奇抜さは読者の関心を引くためのものだったとしても、それが後の時代にも残るなら、人の根本的な傾向や欲求と結びついていったことがわかる。特に詩を中心とした 19 世紀の文学を分析したマリオン・ティンは、一般にモダニズムは 1890 年代を拒否したと見做されるが、実際には連続性があると考え、印象主義に見られる個人の心と外界を結びつけようとする衝動は、ヴィクトリア朝からモダニズムへの移行において重要だと指摘している(232)。ティンの指摘を汲むと、極めて個人的な趣味の領域と個人の外の現実を並べて見せ、その関連を考える「フリッカーブリッジ」のような作品は、ヴィクトリア朝のものとしては異端的だが、現代に繋がる文学の大きな流れには乗ったものであったと見ることができる。

現代のゴシックは、大部分の人が好むには至らなくても、半数以上の人は拒否しないと見込めるものであり、時代の大きな傾向に合っているという一面がある。現代文化では、かつての異端は形を変えつつあるだろう。特に情報発信の方法の変化により、極めて個人的な趣味は、特殊性や危険性を剥ぎ取られる傾向にある。個人の特殊な関心事をネット上で発信するのはもはや奇妙ではなく、一般的な行動である。また、その行動は、害のない特殊性のために多くの人々の関心を集める可能性もある。ゴシックの現代文化への浸透は、このような現代文化の変化とつながっている部分があるだろう。完全に毒を失うわけではなく、象徴的な危険性を孕むことで、ゴシックは大多数と少数の間に存在し続けることが可能になる。

引証資料

Bassett, Lynne Zacek. *Gothic to Goth: Romantic Era Fashion and Its Legacy*. Connecticut: Wadsworth Atheneum Museum of Art, 2016.

Blake, Linnie. "Vampires, Mad Scientists and the Unquiet Dead: Gothic Ubiquity in Post 9/11 US

- Television.” *The Gothic in Contemporary Literature and Popular Culture*. Ed. Justin D. Edwards and Agnieszka Soltysik Monnet. New York and London: Routledge, 2012.
- Cavaliero, Glen. *The Supernatural and English Fiction: From the Castle of Otranto to Hawksmoor*. Oxford and New York: Oxford UP, 1995.
- Cutting, Andrew. *Death in Henry James*. New York: Palgrave Macmillan, 2005.
- Daly, Nicholas. “Technology”. *The Cambridge Companion to Victorian Culture*. Ed. Francis O’Gorman. Cambridge: Cambridge UP, 2010.
- Garrett, Peter. *Gothic Reflections*. Ithaca and London: Cornell UP, 2003.
- James, Henry. *The Novels and Tales of Henry James* vol. XVIII. New York: Charles Scribner’s Sons, 1909.
- McEvoy, Emma. “‘Boo!’ to Taboo: Gothic Performance at British Festivals.” *The Gothic in Contemporary Literature and Popular Culture*. Ed. Justin D. Edwards and Agnieszka Soltysik Monnet. New York and London: Routledge, 2012.
- Riquelme, John Paul. “Oscar Wilde’s Aesthetic Gothic: Walter Pater, Dark Enlightenment, and *The Picture of Dorian Grey*.” *Gothic and Modernism: Essaying Dark Literary Modernity*. Ed. John Paul Riquelme. Maryland: Johns Hopkins UP, 2008.
- , “Modernist Gothic” in *The Cambridge Companion to the Modern Gothic*. Ed. Hogle, Jerrold E. Cambridge: Cambridge UP, 2014.
- Scharf, Natasha. *The Art of Gothic: Music, Fashion and Culture*. Milwaukee: Backbeat Books, 2014.
- Smith, Andrews. *Victorian Demons: Medicine, Masculinity and the Gothic at the Fin-de-Siècles*. Manchester and New York: Manchester UP, 2004.
- Thain, Marin. “Poetry.” *The Cambridge Companion to the Fin de Siècle*. Ed. Gail Marshall. Cambridge: Cambridge UP, 2007.